

- II-5 当科における過去4年間の子宮体癌症例についての検討  
 ○田村 良介 田中 誠悟 石原 佳奈 湯澤 映  
 高橋 秀身  
 (大館市立総合病院・産婦人科)

【背景】近年、本邦では子宮体癌は増加傾向にあるが、その診断においては適切なスクリーニング法が確立していないのが現状である。

【目的】当科での子宮体癌症例から子宮体癌早期発見の可能性を探ることを目的として検討を行った。【方法】平成23年1月から平成26年12月までの4年間に当科で子宮体癌として加療を行った57症例について診療録を参照し、その患者背景や診断契機について検討を行った。【結果】子宮体癌症例57例のうち肥満、糖尿病の有病率はそれぞれ42%(24/57症例)、28%(16/57症例)と高値であった。子宮体癌の診断契機としては不正性器出血が最も多く59%(34/57症例)を占めていた。しかし、不正性器出血出現から受診までの期間と病期・予後に関連性は無かった。一方で、定期的な婦人科受診が診断の契機となった症例は19%(11/57症例)と多くはなかったが、11症例中10例がI期症例であり、しかも11症例全例が無病生存を得ていた。

【考察】患者背景として糖尿病や肥満が子宮体癌のリスク因子であることは既知であるが、実際に子宮体癌症例の中には糖尿病、肥満の有病率が高かった。診断契機としては不正性器出血が最も多かったが、症状出現から受診までの期間と進行期・予後の間に相関性は無く、症状が出現してから短期間での婦人科受診が早期診断・予後改善につながるとは言えなかった。一方で定期的な婦人科受診が契機となって診断に至った症例は早期診断、もしくは無病生存を得ており、定期受診が早期診断・予後改善につながる可能性はあると思われた。

【結語】定期的な婦人科診察が子宮体癌の早期発見、予後改善につながることを示唆された。特に子宮体癌のリスク因子を有する群での婦人科検診が重要であると思われた。

- II-7 地域医療を考える 医食充大作戦  
 ○伊藤実喜 (医療法人健永会 明日実病院)

- II-6 進行食道癌を合併した  
 急性骨髄性白血病を治療し得た1例  
 ○田中 円葵<sup>1</sup> 小笠原 仁<sup>1</sup> 中川 悟<sup>2</sup>  
 鎌田 耕輔<sup>3</sup> 山居 聖典<sup>1</sup> 相澤 弘<sup>1</sup>  
 吉原 綾子<sup>1</sup> 木村 あさの<sup>1</sup>  
 (大館市立総合病院<sup>1</sup> つがる市民診療所<sup>2</sup>  
 独立行政法人国立病院機構弘前病院消化器血液内科<sup>3</sup>)